

小学校音楽科におけるアクティブ・ラーニングの一事例

井本英子

IMOTO Hideko

音楽科の授業は、その科目の特性から学習者自らが活動する。小学校音楽科はその目標に「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」(小学校学習指導要領平成20年告示)となっているように、表現と鑑賞の多様な活動を通して音楽の学習をするものと強調されている。具体的には、歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞の4つの活動からなる。つまり多様な音楽を幅広く直接体験することが基になっている。主体的・協働的に学ぶ学習＝アクティブ・ラーニングを実践することでこの教科目標が有効に達せられると考える。アクティブ・ラーニングを鑑みての授業展開をその教材、実践方法とともに紹介する。

キーワード：音楽科アクティブ・ラーニング、身体表現、『ふしぎなポケット』

1. はじめに

音楽の授業でのアクティブ・ラーニングとして身体表現の学習実践を述べる。

学習者は音楽を聴いて感じ取った楽曲の気分、イメージ、或いは音楽によってふくらませたイメージを身体運動や楽器演奏等で自ら主体的に表現する。その表現は身体全体を使ったり、身体の一部(例えば手、足、声等)を使ったり、楽器や物を使ったりして、自分の表現したいものにさらに近付けていく。その活動の中で他の学習者とイメージを共有し、他者の感情を認めながら客観性、妥当性を探り、他者に伝わる表現を構築していく。

音楽を全身で体感し、自らの意図を満たすこの活動の充実感・達成感は楽しい音楽活動の原点となる。

またイメージを感じ取り他者と共有していく学習過程では、自分の表現を高めるために能動的により深く音楽を聴き、感受性を研ぎ澄ませ、楽曲構成を理解しようとする。それは音楽の基礎的な能力を育むことになる。

さて、指導者は演奏の情報を楽譜から読み取り、頭の中で音楽を組み立てることができてしまう。そのため子どもたちにも同様のアプローチになってしまうが

ちである。つまりアクティブ・ラーニングのつもりでも、言葉が音符に変わった一方的な伝達型講義法になりがちである。そこでまずは指導者がこの学習実践を自ら体験して、身体表現から演奏表現に繋がったときに、いかに表情豊かな演奏が難しくなくていかかということを実感することが意義深い。そこで今回は指導者に焦点を当てた実践を通して考察する。

指導者が牽引するのではなく学習者主体で発想していくには、学習者たちに、より多角的な観点からイメージしやすい題材(楽曲)が必須である。そのために同一素材でありながら比較対照する異なるイメージを発想できる楽曲が有効である。今回は『ふしぎなポケット』(まど みちお作詞、渡辺 茂作曲)を使って、『ふしぎなポケット変奏曲』として展開する。

ふしぎなポケット

渡辺 茂作曲



まど みちお作詞

1. ポケットの なかには ビスケットが ひとつ
ポケットを たたくと ビスケットは ふたつ
2. もひとつ たたくと ビスケットは みつつ
たたいて みるたび ビスケットは ふえる
3. そんな ふしぎな ポケットが ほしい
そんな ふしぎな ポケットが ほしい

旋律構成はト長調 4分の2拍子 8小節。歌詞は3番まである。メロディの音域は1オクターブ、リズムは4小節を反復、和音はIとVで構成される。つまり楽曲構成は複雑でない。また歌詞が具体的でありながらも限定的でないところがこの活動の展開に適している。歌詞自体のストーリーが明確であるとイメージしやすいが、歌詞にしばられて自由な発想が難しくなる。また音楽経験が少ない場合、歌詞のない器楽曲であると発想への手掛りが乏しく難しい。

2. 方法

教育実践の対象：大阪音楽大学指導者研修「幼児・子ども音楽」受講生（小学校教諭、支援学校教諭、幼稚園教諭、保育士、大学教員、音楽教室等指導者等）35名。今回は小学生ではなくその指導者を対象としている。

実施日：平成28年8月20日

実施形態：2日或いは3日間の講習の中の最終日の午前中120分の授業。ピアノ1台と障害物のない広いフロアで実施。

3. 授業展開の内容

実際の授業展開の流れを次に記す。

[1] まず『ふしぎなポケット』をテーマにして6曲の変奏曲として構成した『ふしぎなポケット変奏曲』（井本英子作曲）をピアノ演奏（演奏所要時間約5分）で鑑賞。既知曲ではあるが、新たなアレンジでいろいろな曲想になっている変奏曲を一曲として続けて聴くことで全体の印象を把握することがねらいである。

[2] 次に第1～第5変奏曲を1曲ずつ数回聴いて各自、曲の気分、イメージ等自由に記してもらおう。

第6曲はファンファーレ付き終曲で曲想はテーマに準ずる。この段階では他の人と意見交換をせず、自分だけのイメージを自由に発想してもらおう。

[3] 1曲毎に2～3人のグループでそれぞれが曲

から感じたことを話し合い、そこで出た意見を他の受講生に発表する。

楽曲構成の技術的な部分（調性、和声、拍子やリズムのことなど）を主に捉えている人や、一曲ずつ的確に特徴を捉えてイメージをする人、テーマから終曲までを一つのストーリーとして捉える人等それぞれ着目点異なる多様な意見が活発に出ていた。曲の特徴がはっきりしているのも、着目点はちがっても基本的には共感していた。

ここでは各テーマの楽譜の一部分を記載しておく。さらに発表の中で出された意見を各変奏曲ごとに順不同でまとめて記す。

Variation I



<第1変奏曲についての意見>

- ・小人が走る
- ・小人のたわむれ
- ・あひるの親子
- ・はつかねずみのぬすみ食い
- ・森の小鳥のさえずり
- ・風
- ・朝の準備に忙しい
- ・ビスケットと男の子の追いかっこ
- ・金平糖が転がって妖精が飛び回る
- ・キラキラ星変奏曲

Var. II



<第2変奏曲についての意見>

- ・前に進んで出発
- ・ビスケットを作っている
- ・波
- ・何かが始まる
- ・野原で子どもと遊ぶ
- ・仲間との遊び
- ・小人が家を作る
- ・公園のお散歩
- ・パリのお散歩
- ・ウキウキ
- ・ピエロが体操
- ・スキップをするが、たどたどしいおじさん
- ・さんぽ
- ・おつかいありさんのイメージ

Var. III



<第3変奏曲についての意見>

- ・夜、森の中
- ・月夜
- ・海の中でビスケットが溶けて魚がついばむ
- ・霧の中で森の中をさまよう
- ・山の中、迷路で迷う
- ・不思議な感じ
- ・蛇が脱皮して美しい女性になり里へ下りてきて男性と
出会う
- ・怪しげな洞穴
- ・小人と少年
- ・疲れ果てた親子が不思議な世界へ
- ・満月の夜、何がいるかわからなくて一人引き、二人引
き・・・
- ・森の中で洋館を見つけて何かが起こる
- ・月
- ・宇宙

Var. IV



<第4変奏曲についての意見>

- ・晩秋
- ・人生に敗れた大人
- ・追憶
- ・切ない
- ・悲しい
- ・一人ぼっち
- ・広い草原に一人
- ・男女の別れ
- ・悲しいことがあったけど前向き
- ・迷子
- ・負け感
- ・洞穴に入ったら星空が広がる
- ・天空の城ラピュタ
- ・フィンランド
- ・夕方恋人同士がビスケットを食べる
- ・迷子の少年
- ・昼ドラ
- ・韓流ドラマ

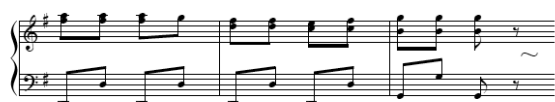
Var. V



<第5変奏曲についての意見>

- ・海の底
- ・雷
- ・重い
- ・壊れる
- ・力強い
- ・未知の世界
- ・禁断症状
- ・絶望
- ・破壊
- ・破滅
- ・挫折
- ・メガビスケット
- ・決闘
- ・勝負
- ・壊れた機関車
- ・身体が勝手に動く
- ・ブラックホール
- ・灼熱の沙漠
- ・ビスケットがオープンの中で焼きあがったとき

Var. VI ファンファーレ付き終曲



[4] 4グループ(8~9人ずつ)に分かれて各グループで自由に2曲を選び、身体表現をする。

各変奏曲とも前奏、テーマを2回繰り返し、後奏が付く。

表現を援ける物としてボール、ホースリング、ゴム、シェイカー、カスタネットを準備。各グループで必要なものを自由に使用した。

ボール



渡す、転がす、回す、つく等。投げる、蹴る、当てる以外の使い方。

ホースリング



渡す、首や手に掛ける、形を変えて持つ、ならべてステップや目印に使う等。

ゴム



伸び縮みをいかして直線や曲線を表す、即興的な図形を表現する、皆で持って動くことによってまとまった中で各々が自由な動きをする等。

シェイカー



音量の小さなシェイカー（持って動いても気にならない音量）。皆で揃えて鳴らせばパーカッションとしての役割も果たす。

カスタネット



持って動ける打楽器。はっきりとしたリズムアクセントを奏する。

[5] 各グループでタイトルを付けて発表。お互いに鑑賞しあう。各グループの選択曲とタイトル、講評を記す。

<Aグループ>

『神秘の出会い』

第6曲 「さあ、森へ出発だ」

曲の元気な感じをしっかりと捉えた快活な動き。カスタネット、シェイカーはパーカッションとしての役割だけでなくステップの中で上手く使用していて視覚からも効果的であった。

第3曲 「そこで・・・出会ったものは」

ゴム、ホースリングの他に手持ちのスカーフや傘も使用。深い森で出会った蛇が脱皮して美しい女性に変わるというストーリーを表現。

<Bグループ>

『ビスケットの旅』

第3曲 「海に漂うビスケット」

ゴムを使つての動きの中で海中を漂う感じを上手く表している。拍にとらわれない動きでの表現。

第1曲 「男の子にみつかったビスケット」

曲想を「ビスケットと男の子の追いかっこ」と捉えた表現。みつけたビスケットを追いかける感じをボールと動き方で上手に表している。



第1曲の発表

<Cグループ>

『妖精の舞』

第2曲 「歓喜の舞」

付点音符の弾んだリズムをいかしてスキップを活用。フォーメーションの変化がよく構成されている。バレエを踊ることのできる人が妖精役を上手く表現。

第4曲 「平和の祈り」

8分の6拍子の揺れる拍子感を生かした、流れるようなきれいな動き。きれいな大きな動きでホースリングの受け渡しをすることで大きなフレーズ感も感じられて平和な気分が伝わる。

<Dグループ>

『初めての運動会』

第3曲 「眠れぬ夜」

運動会前夜のワクワクした期待と不安な心の揺れを拍に捉われない動きで上手く表現。

第6曲 「小人の運動会」

ゴム、ホースリング、ボールを使つて運動会のいろいろな競技の様子をリズムにのって表現。生き生きとした快活な動き方で曲の明るい雰囲気がよくでている。



第6曲の発表

4. 考察

各グループの作品を記述で再現することはできないが、各タイトルからわかるように同一素材から自由な発想と創造性に満ちた作品となった。

指導者が対象であったので結果的に構成力が高く作品としての完成度も高くなったのであるが、既知曲で音楽の骨格が容易に捉えられている上に、短い中に多様なイメージを感じられる題材であったことで活発な意見交換になり表現力を助長したと考えられる。

コンパクトでイメージしやすい題材を選び、その題材をいかに表情豊かに提供できるかということがこの活動の道筋を大きく左右する。

この研修ではこの後午後の授業で、様々な演奏表現（歌唱一斉唱・重唱、ブームワークでのメロディ奏、トーンチャイムでのハーモニー奏、ミュージックベル演奏、マリンバアンサンブル）へと展開する。アクティブ・ラーニングで能動的に多彩なイメージを体感する身体表現活動を経た上で、豊かな表情を伴った演奏へ導くことができることを学習者たちは自らの演奏で実感することができた。単に音符の再現ではなく、表情を伴った音楽を表現するところからのこの身体表現活動の体験が、歌唱や楽器演奏等表現手段のちがう応用過程においても常に表情を併せ持った音楽として表現できることを学習者は実感した。

5. まとめと今後の課題

教科の中でも演習の占める割合の多い音楽科ゆえに、ともすれば学習者が活動していることで音楽に対して能動的に取り組んでいると自己満足してしまう。楽曲完成のみが目的になりがちな演習活動とはちがって、アクティブ・ラーニングを鑑みた一事例として、この身体表現を用いた授業展開では、学習者が主体となっ

て感じ捉えた楽曲の表情を自らの感情として表現表出する。その体験から更なる表現方法に発展し、より深く楽曲を理解し音楽力を育てることになる。その際、発想力を発揮できる適切な題材を選び、魅力的に学習者に提示できる指導者の力が鍵となる。

みんなで楽しみながら表現をするうちに、その音楽への理解が深まり自己の音楽力が高まっていく感動を指導者が実際に体験することは、とても有意義であった。今後指導者たちが、本研修を実際に授業に導入する上で生じうる課題を汲み取り、より発展的なアクティブ・ラーニングを使った指導法を確立していきたい。



ミュージックベル演奏発表



マリンバアンサンブル演奏発表

6. 引用文献・参考文献

文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』（平成20年6月）

ピアスーパーバイザーからのコメント

体の底から湧き出てくるような曲のイメージを子どもたちが感じとるためには、おそらく教室自体が多様なイメージを受け止めることのできる器となって、

その中では、特別な空気感が醸し出される必要があるだろう。それをまず用意するのは指導者ではないだろうか。その指導者は筆者が述べているように「身体表現から演奏表現に繋がったとき」その妙味を体をとおして実感できた人なのだろう。等々。本稿は、大学における指導者研修の視点から子どもがどのように学ぶことが大切なのかを刺激的に連想させてくれる。アクティブ・ラーニングという語で括りきれない不思議な力を感じる事例である。子どもから大人の世界の入口へと向かう、学童期の成長過程において、耳から聴くことだけを強いられるような音楽の学習ではなく、体全体で音楽の世界を生きる経験は「私」の内的世界を豊かに育み、「他者」との柔らかい繋がりを育てていくうえでも、非常に貴重なものである。今後小学校での授業実践などにおいても、どのように発展していくのか期待される取り組みである。

(担当：番匠 明美)